奈良のむかしばなし

第51話

奈良に古くから伝わるむかしばなしをご紹介します。

飽波神社と雀

文・山崎しげ子

秋色に染まり始めた斑鳩の里、その東南の安堵町。稲穂が風にそよぐ緑の田園風景の中に、古い神社やお寺、瓦屋根に白壁が美しい民家が見える。昔懐かしいたたずまい。

安堵町は、聖徳太子ととりわけゆかりが深い。

＊

聖徳太子は、推古天皇の即位とともに皇太子となり、摂政として政治を行った。冠位十二階、十七条憲法を制定、遣隋使の派遣、また、仏教興隆に尽力したとされる。

太子が、自らの学問所として建てたのが斑鳩宮。太子は、その斑鳩宮から当時飛鳥にあった小墾田宮まで、愛馬の黒馬に乗り、従者の調子麿を連れて通われた。

ある時、太子が飽波神社の前まで来たとき、突風が吹いた。雨が降り出し、たちまち水が道に溢れた。

その時、どこからともなく、何万羽という雀が飛来し、太子の前で舞った。太子は大変喜ばれたという。

それから、飽波神社では雀を神の使いとして保護し、このあたりでは、昔から雀を獲って食べないといわれている。

＊

斑鳩宮から飛鳥までの道を「太子道」という。また、飛鳥時代の南北に走る大きな道に対し、太子道は西に二〇度ほど傾くため「筋違道」ともよばれる。

飽波神社には、今も拝殿の奥、本殿の正面には彩色も美しい「竹と雀」の彫刻がある。また、楠や松の大樹が茂る境内には「太子腰掛け石」も。

拝殿には、宝暦六年(1756)に奉納された雨乞い祈願の成就を祝う「なもで踊り」の絵馬が、宝庫には、祭具、衣裳などが残る。記録によれば、祭具にも雀の飾りが使われていたとか。

また、鳥居にかけられた額は、安堵町出身の陶芸家で人間国宝の富本憲吉の揮毫である。

十月の「なもで踊り」が終わると、安堵の秋はますます深まっていく。

飽波神社

飽波神社は、太子道沿いにある。

本殿の「竹と雀」の彫刻と、拝殿に掛けられている「なもで踊り」の絵馬は、拝殿の格子越しに見ることも出来るが、年5回、拝殿が開かれる。

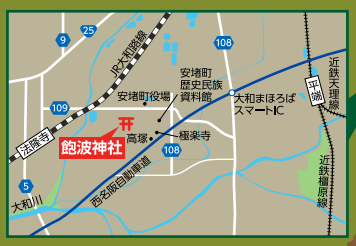
なもで踊り

平成7年に、飽波神社の氏子さんと商工会が中心となり、約100年ぶりに復活させた踊り。小学校の運動会でも踊られている。毎年10月第4土曜日に行われ、その日は飽波神社の拝殿も開かれる。

物語の場所を訪れよう

「飽波神社」(安堵町東安堵)へは…

JR法隆寺駅または近鉄平端駅から安堵町コミュニティバスで「安堵町役場」下車、南西へ300m



問 安堵町商工会 ☎0743-57-1524